

新力
青

序 章

ハロウィーンの没落とともに黎明したジングル・ベルの狂操秘祭は十一月の末に、いよいよ聖なる狂騒楽のシャンパーニユを氾濫させ、カフェのジャズも華やぎ、冬のコートにも深みを添える。

とは言え、年の瀬は人の思いもさまざま、補習を終えて急ぎ階段を上る学寮生は皆無口で、思い詰めた表情、何も眼に留まらぬかのようなであった。哲学テストは学習すればよいというものではない。

誰も彼も苦しむが、特に今、忙しく去った者たちは尋常ならざる苦悶の表情を泛べていた。

白き静寂の冬なるキャンバスに、濃い緑と鮮やかな赤のリボンカレッジを翻す聖なる華やぎもいずくにや、今年は成績が思わしくない彼ら、朽ち果てし学寮の蔦の葉のよう、顔を秋枯れに落ちた朽葉色に変えている。

憂いに蒼き翳りの眸や、物憂げに揺れる柔らかな髪、古色蒼然たる建築の薄明かりに照らされる繊細な青白き頬、それらいずれも悩ましく、美しくはあるが。

飛び級制によって、十四歳で眞神真義塾附属高等学校一年生となった僕にとっては、期末考查に喘ぐ者など、所詮、何の関係もない、縁なき衆生えにし。

自習も予習も復習もすることもなく、僕はアルパカのセーターで学寮の一階の居間に深々と坐し、暖炉に頬を照らさせ、銀製のアンティーク・シヨコラポットを惹き寄せて、シヨコラを啜る。谷崎潤一郎の『刺青』を読みながら、瞑想に耽溺していた。

暗褐色で厳めしい檜の棚には皮革装幀の古文書、イタリア製の楓の寄木細工のアンティーク筆筒、ゆっくり動く振り子の大時計が蠟燭の炎のように、意識を遠のかせる。時を経たものには、眩きのごとき空想が僕の意味に係わらず付与され、鬱たるきらびやかさが幽玄、能舞のごとし。

僕はセーブル窯で焼かれたカップを安楽椅子の肘掛の胡桃材の美しい木目の上に置いた。ゴブラン織りのタペストリーが沈黙し、ちらちらと炎が奥深い影を生む。墨の濃淡のように。

「奴らに楽しい年末年始があるかどうか。それは決定的に未知だ。現実がどう動くか、ふ、僕に、わかるものか。

そもそも、すべてが意味不明。

真実の探しようがない。何が現実なのか。成績不振に因る留年も、人が制度上に作り出した虚構だ。羞恥も屈辱も挫折も。

だが、そう言うのと、非現実的と批判され、戯けた寝言よと判定され、自分が超越的な存在であるかのように気取っているなどと査定される。

そういう批判・判定・査定が下される根拠となっている評価設定と言うか、価値基準、範疇、それらの定義・仕様も含め、一切が虚構でしかない。

いや、それ以上だ。語義も概念も含め、すべてについて、同じことが当て嵌まる。虚構だ。空架の楼阁だ。思考一切、考概の何もかもが虚構だ。

そればかりか、いや、それゆえに、虚構だ、虚構だと貶すことすらも、その卑下の根拠となる上下観は虚構だ。そうさ、むろん、虚構だ。虚構でなければ筋が通らない。とすれば、虚構、虚構と呼ばわることが何かの批判たり得るか。

たり得ない？ いや、じゃその根拠は？ 堂々めぐりと言うか、ふん。愚劣だ。

くだらない。こんなことは戯論けろんの類だ。埒もない。

ふ

腐った林檎の匂いを嗅いだような気がした。

だが、僕は嗅いだ経験がない。実際、どんなものかを知らない。冷暖自知と言うように、嗅がなければわからないはずだ。ならば、なぜ。

誰かから腐った林檎の匂いの話を聞いたことがあったとしても、それ丈では、知らぬも同然だ。

だから、なぜ？

ゲートと並び称される詩人・劇作家のシラーは腐った林檎の匂いを嗅ぐと、仕事がかどると言ったという。人間の思索とは、決してロゴス的ではない、得体の知れない、牡蠣の身のようにぐちゃぐちゃなものであるう。

「現実って、往々にしてそういうものさ。

あゝ、現実に戻れ、とは言うが。

だが、現実とは、何か。

蛇が見ている現実と、僕ら、いや、僕が見ている現実とは、まったく違う。蝶々が見ている現実も、泰山の巖が千年観る現実も。

現実とは真実でも、事実でも、客観でも、実在でも、他者でもない。そもそも、それらのその輪郭が選ばれた経緯も理由も意義も、僕らは知らない。

現実って、いったい、何者なんだ、ってことだ。

現実に限らず、一切諸考概のデザインや意味の輪郭は、いずれに拠って決まるのか。ありとあらゆる輪郭線が描けるのに、なぜ、そのフォルムを描線するのか、その経緯も理由も意義も、僕らは知らない。見出せない。

すべては憶断、先天的な思い込み、慣習的で無根拠な思考、ドクサに依存せざるを得ない。

ただし、そこを疑うならば、(論理上は)どこにも足場を設けられない。足場のない、まったく自由な空間に、人はいられない。

すべてについて疑うことは不可能だ。零から出発することはできない。懷疑の極北へは辿り着けない。疑うことにも疑義を呈さねばならないし。

論理なんか屁だと思ふ無法な奴らなら、べつだろうが。だが、論理以外の思考方法があるのだろうか。

もっとも、すべての疑問は自由と選択肢とがあるということを前提にしている。『なぜ、そうなのか』と問うことは、『なぜ、(他にも選択肢があったにも係わらず)その輪郭ではなく、このフォルムなのか』と問うことだからだ。

選択肢(≡自由)は実在しないのかもしれない。

だが、それをどうやって確かめられよう。

そもそも、確認の素材たる概念と確認のすべてたる考概が当てにならぬのに？
ふ。

だが、いかに懷疑しようとも、その最果てまで行こうとも、いずれにせよ、僕らの心は情を起こす。僕らは観ずる。それが世界だ、現実だ。勉強せぬ者の成績が落ちる因果応報も、それに過ぎない。神話だ。切実ではあっても、空想と言ってよい。

もし、留年したとしても、車輪が泥道に轍を刻むように、右の手に握るものが右の手のうちに在るように、自ら選んだ道だ。恥ずるべきではない。人、堂々果敢すべし。眞神古来のテーゼだ。

顧みすれば、すべての現象が心々。だとすれば、心の機^{はた}らきを検^け見^みして、すべてを弁^わえ^きればよい。良く整えし己こそ真の寄る辺と謂う。

とは言え、心こそは他者である。心丈が他者である。心のみが僕らの希いを無視し、言うことを聞かない。

現実の現実たるべき現実性は、意のままにならぬということにある。思うままにならぬ

という無慈悲、無情さ・非情性が現実性として感じられ、観ぜられる。

心の持ち方次第だ、と言っても意味はない。だが、事実だ。意のままにならぬ事実である。

僕が余裕なのも、僕の感受にリアルだ、無意味なりアリティだ。空疎で、現実だ。

彼らが破滅的な気分であることも、それにまして事実だ」

そんな状況下でも、雪の降り始めた田舎にある、だるまストーブの教室においては、いつものように授業は粛々と進められるのである。

だから、当然であろう、昨日の午後、十一月二十九日火曜日、先生が突如、間違った数式の話を持ち出したとき、僕は何事かと驚いた。あんぐりと口を開けていただろう。呆然としない者は状況判断が不適切であると言えた。

これを唐突と言わず、何を唐突と言うか。とてもアヴァンギャルドな感じがした。何せアヴァンギャルドなふうが囃される土地柄である。

「校舎の壁の、日当たりのよい、地上二メートル五十センチくらいの高さのところね、風雨に晒された落書きがあつてね、よく見るとね、数式なんだ。いや、それが間違つててね、どう考えても矛盾するんだよ」

数学の授業ですらなかった。哲学の先生である。

第一章

眞神郡眞神村の眞義塾附属高等学校には、フランスの高校生のように、哲学の授業があり、哲学のテストがあるというばかりでなく、哲学テストは、いつも試験の初日の一時間目であった。

哲学こそすべての学問の基礎、第一の学であると定義づけられているからだ。

むろん、それで間違いない。基礎科学が大事なように、基礎学は大事だ。

三十七歳の由来ゆらいよしお緒来先生はツイードのジャケット姿で、口髭を蓄え、ひょろりと痩せているのに太い深い声、それでもユーモラスで、飄々としていて、生徒から尊敬され、人氣があつた。由来家は天文占星を専門とした古代の学者一族、天易家から分岐した家柄で、

学問上、優れた輩が出ることが多い、ということも、尊敬と信頼の所以である。だから、今回の奇態な発言についても、

「さすがだね、ユーライ」

という生徒もいたが、賛否両論、喧々囂々であった。

「遂に、ユーライも堕したか」

「見せ掛けのアヴァンギャルド、安易な前衛気取り」

そういう批判精神は我らの伝統文化だ。長く永く積み上げ築き上げてきた文化の歴史がさまざまな見解と分析の手法を伝統的に精神に浸透させ、細胞の一つ一つに内包されているため、高校生とは言え、諸現象を安易に受諾しないのであった。

眞神は一万年の歴史を持つ。南アフリカのナミビア砂漠周辺に端を発し、北上して、エジプト、リビア、地中海を経て東へ、マケドニア、ガンダーラ地方、インドを経て日本に到達した。紀元前七百年よりも前だ。うがやふきあえずのみにこと 鷗鷺草葺不合尊の時代であった。

さて、それはどうでもよい。

十二月一日木曜日の放課後、それが僕にとっての端緒だ。眼の前でつぶやかれた言葉、
「俺はそうは思わない。」

これは次のテストのヒントだ」

芝居がかった口調で、そう言い切ったのは、ノイロのろい（呪_し彝_び 史比留）。

黒い革のソフト帽を斜めに、焦げ茶色のタイ、柔らかいキッド・スキンの黒ジャケット、顎に手を当て（まるで、作家のプロフィール写真みたいだ）、額を歳経りし煉瓦のような翳りに浸っていた。

ちなみに、眞神眞義塾附属眞神高等学校には制服が定められているが、諸々の事情を配慮し、私服も認められている。

彼はフィリップ・マローウが好きで、最初はノローウ（又は大鹿マロイをもじってノイロイ）と呼べと言っていたのだが、アニメだか、ゲームだかのキャラに、そういう名があつて嫌気が差し、ノイロにしたのである。つまり余談だが。

名もない登場人物である衆の一人が言った。

「本当にそうか。風雨に晒された落書きだつて言うぜ。今回のテストの問題を、何年も前から仕込んでいたのか」

「たまたま、それを見掛けて、問題を思いついたのかもな。いずれにせよ、この時期、敢えて口にしたんだぜ。関係しないはずがない、テストに」

ノイロが大袈裟に手を広げて言い切った。それは、自分がこういうキャラであると見せたいキャラに、人から見られるようにするためだ。クールでいて、ちょっとイカれた、

タフなキャラ、とでも言うのか。ソフト帽を被るのも、昔のハード・ボイルドのイメージに相違ない。『薄い』感は免れないが、そこまでも、タフさの演出なのであろう。アメリカのペーパーバックのような奴だ。

とは言え、彼の主張する説は順当であった。至極妥当と言ってよい。陳腐なほど。

テスト直前の授業で、問題に関係する内容に触れるのは、今も昔も、どこの学校も、似たり寄ったりだ。ノイロの『読み』は普通であった。

しかも、試験問題予測委員会が公式に認定されている学校である。そういう遊びを想定しない方が不自然ですらある。

予測委員会とは、一見不正不適切な存在にも映るが、理に適っていた。問題を予測することは、授業をよく聴いて傾向をつかむ必要がある。これは予測を立てる者ばかりに当て嵌まることではなかった。自分で予想せずに、他人の予想を聴いていづれかを選ぶ者であつてもだ。

予想は常にさまざまで、その中から取捨選択しなければならぬ。高率で予想的中する、当確の常連者などいなかった。

他力本願の者たちも、選ぶためには、知識や理解が必要だし、又普段の授業の状況分析ができなければ、判断を誤る。楽な他力本願などあり得なかった。受け身の姿勢丈ではあり得ない。

その上に、同じような答でも、点数が異なることはざらだ。

僕は言った。

「それは在り得るけれども、どんな数式なのか見てみないと。どこにあるんだ」

「俺が知るところか。由来に訊いても、教えないだろうな」

僕もそう思った。

でも、この世に「ダメで元々」という言葉が存在することは無駄ではないはずだ。一度、訊くだけでも訊いてみた方がよい。訊かずにわかるものかは。

そんな思案もしつつ、どうすべきか決すべく、シミュレートしていた時であつた。

会話を聞いて、割り込んできた奴がいる。

ル・パン（一松 ^{こまつ} 世 ^よ）。Le Pin は仏蘭西語で松）であつた。黒いシルクのシャツ、ど派手なまっ赤なネクタイに、鬱金色の渦巻き文様（正確には、渦巻きではなく、尾形光琳の『紅白梅図屏風』紙本金地着色二曲一隻の川のような文様と言うべきであらう）、明るめの赤いブレザー。ケンブリッジ大のボート部がカレッジ・カラーである赤のジャケットを着

ていたことが起源という説があつて、それゆえブレザーは赤が正統という説は本当か？
ル・パン曰く、

「おいおい、何の話かな、君たち、教えないって？ 誰が？ ユーライが？

いやあ、そうかなあ、いや、いや、教えるみたいだぜ、ユーライってさ。既にボルドー
(文殊 菩壟土) がユーライに訊いて、場所を教えてもらったらしいぜ。

ふん、君たち、ドクサはいかんね、臆見・憶断は。

いやあ、実にいかんね。怪しからんよ、不謹慎だよ、いやはや」

お道化^{どけ}て嘲笑する悪魔のような、からかいの口調でそう言つて、韜晦者のようにゆつくりと微笑する。

ボルドーか。文殊という名には似合わない男だ。手際のよいお見事な明知はない。寡黙、
実直、実行型。なるほど、彼なら、やりそうではある。

ノーイロは軽佻浮薄調のル・パンに眉を顰めたが、明らかに落胆したようだった。

「ちえつ、くだらねえや。じゃ、テスト問題じゃなさそうだな」
だが、僕は思った。

「そうかな。簡単に決めるなよ。ふ。

裏を搔くということもある。ともかく、見て考えよう。行つてみよう。じゃ、ボルドー
に訊けばわかるんだな。

さて、行動だ。そうさ、見なくちゃわからん」

ル・パンはうんうんとうなずきながら、

「そう、そう。今は、実証科学主義の近代以降なんだぜ。むろん、むろんだ。俺も行くぜ。

行くさ。行かぬものかは。さ、ノーイロよ、いつものこと、ジャクニ(天之若爾)^{あまのじゃくに}の言
うことが正しい、ご尤もだぜ」

「らしいな。俺にも思えて来た。んじゃ、行くか。さ、逝こうぜ。善は急げ、悪はゆつ
くり、ギムレットには早過ぎる」

すべったなと思った(当然だろ)らしく、さっさと先に歩き出す。

廊下を明るく斜めに差す、深い日差しが在った。廊下の曲がり角の直角の壁に壁龕があ
る。そこには眞神の神々の一柱が必ず飾つてあつた。傾く陽射しは物事をリアルにする傾
向がある。しつとりと生々しく、くつきりしていた。

既に放課後、午後三時は空氣が茜を帯びた黄金、もう雰圍氣は黄昏だ。一年三組に行く
と、ボルドーは部室の集合棟である『バツカスの蔦』^{つた}寮にいる、ということらしい。いつ

も思うのだが、このネーミング、普通に葡萄の蔦じゃいけなかったのか。確かに、バツカスは葡萄酒の神ではあるが。

などと、半ば自動的に脳神経細胞がインパルスを発火させ、アラベスクのような蔦模様を想い泛べている。

文学倶楽部に行ってみると、いなかった。

二年生のトリあまやす くきょうトリ（天易 究竟鳥）が独りでいる。

タイトなシャツ&ジャケットを着崩し、細いタイを緩く締めていた。耳朵に安全ピンのピアスをしている。どうやら前世紀⁷⁷のオリジナル・パンクに思慕を抱いているらしいかった。彼が教えてくれる。

「茶道部に行っただぜ。」

ちなみに、作法室の方じゃないぜ。庵いおりさ。喫茶去庵きつちあ。イイヨひらえ いじょ（平衛唯々与）が家から持って来た茶陶を見に行くとか言っていたな、ふふん」

「平衛家にも、名物があつたか。武門の家柄だが。いやはや」

僕は腹が立ったせいもあり、思わずつぶやいた。傲慢だ。平等でも、客観主義でもない。高貴なる者は耳が小さいのだ。

「余計なこと言うな、ジャクニ」

とノイロが言い、ル・パンは如才なく、

「ありがとうございます、アマヤス先輩。んー、びやうていふうる」

と流麗非礼な辞儀でお道化るも、僕は関心を示す気もなく、気持ちは、はや茶室へ飛んでいた。

ノイロは去り際に、トリのジーンズのポケットに差されていた金属に眼を留め、

「ハーブですか」

ブルース・ハーブはホーナー社製の単音十穴のダイアトニック・ハモニカの商品名で、ハーブと言っても、弦鳴楽器のことではない。常識だが。

「あゝ、そうだよ」

トリがすかしてそう言うのを聞くと、僕はまたもや余計なことを言いたくなり、

「文学倶楽部で？ ハモニカ？」

文学部は正規の部活動だが、倶楽部は違う。顧問のつかない活動だ。文学倶楽部は愚連隊の集まり、パルチザンの集まり、革命家の集まりであった。トリは言う、

「小説さ」

両手でくるむように持ち、ベンディングさせながらスライド、半小節吹く。

三人呆然。

「小説？」

トリは憐れみのまなざしで、微笑し（だが、僕は激しく嫌悪しながらも、それを美しいと思った。美苦笑と言うべきだと）、嘲るように、

「文字で書くものが小説とは限るまい。メディアは何でもよい、本質があれば。だが、実存は本質に先行する。当然だ、本質は実存の一部に過ぎない」

「で、今の、何が書いてあったんですか」

「ブルース・ハーブのサウンドさ」

「え？」

「サウンドを言葉や文字で表現したら、間接的だろ。当たらない。それそのものではない。実存ではない。久米正雄がトルストイを作り話と批判したようなものさ。（あったことをそのまま書けば事実だと思える感覚もおめでたいが。デカルトの時代ですら、懷疑していたのに）

サウンドそれそのものをメディアとして使えば、もう、メディアではない、それそのものだ。

直截で、不離で、それ自体であって、偽りであろうはずもなく、すなわち、真実だ」

さすがに、ノイロも言わずにいられなくなったらしい、

「そりゃ、そうですが、いったい、何なんですか、それが。何の意味が」

だが、問いに対応するはずのトリの応対は奇妙なもので、

「いや、どうだろ。わからないな。いや、端的に、そういう訳じゃない。そうだね、現実。

ただ、それ丈かもな」

わざと含みを持たせ、敢えて端的に答えない、奥があるかのように見せ掛ける安易な曖昧さに、僕は苛立ち、

「全部、現実だけどね」

と皮肉な口調で、タメ口で、苦々しく言った。

どうせ、同級生も皆、年上だ。彼らにタメ口なのに、トリにタメ口じゃないのはおかしい。そうすることが理に適っている。ふん。

それに何よりも、陳腐な思想にイラつく。語っていることは、わかり切ったことだ。『龍肯』だ。眞神の古代からの究竟真実義（究竟真実義の中の究竟真実義なので、真究竟真実

義とも言う）で、龍のごとき大いなる、無礙、非際限（無際限と言うよりは非際限だ）、全方位的な肯定のことだ。

眞神の史書『眞神神統記』の第一書『太祖神』の第一篇『礎』の第一部『彝亞咽厨御』の第一章『究竟』の第一段『清明』の第二節に「太祖イージュ（※註1参照）は語りて曰く、『清明たれ、龍のごとくに肯ぜよ』とぞいふ」に由来していた。

※初代王彝玖邇の祖先。紀元前五万四千年前に眞神族をまとめたという伝説上の族長。神彝亞咽厨御の末裔であるという。

トリは僕のタメ口を鼻で嘲り笑った、優越者のごとく、縁なき衆生は度し難し哉、と言わんばかり。

人は常に、僕にとっては、興味深いものだ。

さて、「とてもかくても候」な、どうでもいい、パンクな、軽いジャブのような、短い思索バトルは終わって、僕らは『バツカスの鳶』寮を出た。

ル・パンが言う、

「しかし、テスト前で、部活動停止期間中のはずなのになあ、何で、あの人はあそこにいたんだろう」

「それが文學倶楽部なのさ」

喋りながら、庭を往く。古い神社みたいに鬱蒼とした大木しかない中を抜けていく。歩こうちに、午後四時に近くなった。シャンパン色の空気は、ピンク・ゴールドから脱し、ブルーを孕み始めている。四阿あずまやがあつて、その先に牆があり、戸を切つてあつた。開け、露地に入る。庵が見えた。鐘楼からの音を聞く。智慧の眼醒めだ。

僕は古着屋で買ったオリーブ色のミリタリー・コートの前ボタンを全部閉じた。寒いし、そういう気分だ。

黒髪が真っ直ぐな女子生徒が突っ立っていた。細く切れ長の眼、眼尻は吊り上がっている。膝丈のダッフル・コートを着て、フードを被っていたけれども、奥で双眸が燦めいて見えた。長いマフは焦げ茶色や白、赤や山吹色が交ざった、粗い感じの生地に、地中海的な東洋らしさのある、エスニックな絵柄のものである。

「いないよ」

イイヨが言った。

「って言うよりかは、待ってるのに来ないのよ。絶対に見たいって言うから、部活停止期間中、かつテスト勉強もしなくっちゃ、って時に、わざわざ、ここで待っていてやってるのにさ」

強いまなざしだ。

細いけど、生命の光にあふれていた。

生命と言っても、太陽のような生命ではない。生命の樹でもない。古代人が感じた蛇の生命だ。脱皮する蛇は死と再生の象徴のように思われた。円環の生命。そういう意味では、沈んでもまた昇る太陽と蛇とは関連づけられていた。だが、蛇には、農業革命以降の太陽信仰と結びつく以前、もっと深い部分で、人間にとつての生命の象徴であったような気がする。鱗のある生類。水の精の真髄。

古代中国神話の女媧が蛇身なのも頷ける哉。想いに耽る。

「俺たちも待つか。いや、それとも、他を当たるか」

暢気なノーイロの言葉に、夢想を破られた僕は焦燥を募らせ、苛立った。

「待つ気はない。まったく以てないね。誰か、ボルドーと仲の良い奴を知らないか。其奴のスマホに掛けてみるよ」

ノーイロが手を打つ。

「あゝ、そうだな。タケルやアキラやヒロトはどうか」

「誰でもいいけど、番号を知ってるのか？」

「いや。」

ル・パン、おまえ、どうだ」

……、知らないのかよ、知っているみたいに言うな。

「むろん（何で“むろん”なんだ？）、ふふん、知っているさ。掛けてみるぜ」
留守電だった。

ノーイロはソフト帽の鰐の先っぽを弄りながら、あからさまな舌打ちをし、

「ちっ、肝腎な時に使えねえな。ま、仕方ないや」

自分の非難が理不尽な非難だと知りつつ、それを恥じながらも、言わずにはいられないのであろう。帽子を弄るのは羞恥の隠蔽だ。

僕もまた、自分の先程の、安易な、無防備とも言える苛立ちを恥じ、自分で自分に余裕を見せる必要性に迫られた。敢えて、

「まあ、落ち着こう。すぐに、返信してくるさ。焦っても仕方ない。それまでは名物とや

らを見せてもらおうか」

「いいわよ」

突っ慥貪だが、悪気はない。良く言えば、さばさばしてる、男っぽい。良いのかどうかわからないが。

彼女はさっと躡り口をくぐって、書き損じの和紙に包まれた碗くわを入れた桐箱を持って出て来た。

イイヨが差し出す。

「茶室の中じゃなくていいでしょ？」

数寄屋造りの茶室は狭いし、躡り口が面倒臭いだろうから、この軒下で見て。その方が
「良いよ」

手に取って眺め回す。人間の情など、不味い淹れ方をした時のコーヒーの雑味みたいなものだった。名品を見るといつもそう思う。

志野焼の茶碗だった。長石釉という釉薬をたっぷり使って白く、小孔や貫入の景色が味わい甚深で、高台の土味が堪らない。

茶碗のみならず、小孔や貫入、火襷など、細部が人為では決し難い、他者性が風合いを堪能させる。景色と呼ばれるその見処が、自然の風物のような味わいを遺す。他者性が肝だ。愛想のなさ。武骨とも言えるし、唐突とも言える。

これがもつと枯れ、寂びて極まれば、「冷えている」「凍えてる」ということになるのか
もしれない。侘茶の精髓だ。

「いいね、実によい。芸術だ。叡智がある。真理がその美だ。真理性が芸術だ。芸術は魂を涵養する」

それは僕の芸術に対する基本コンセプトだった。

しかも、そう言いながら、ブルース・ハープを想起している。なぜ。

妙味が不可思議なことにハープと繋がった。

剥き出しのサウンドを露呈することと重なった。

トリの考え方には感心しない。関心もない。陳腐だった。だが、真と思わせる何かはある。

唐突に、ル・パンのスマホが鳴った。まったく、何処も彼処も、何もかも、すべて唐突だ。意味も由来もわからない。だから、彼は受話していた。

「もしもし、へえ、そうなんだ」

応えた言葉はそれ丈。

ハード・ボイルドだ。

「どうした」

「どうやら、図書館で、あ、高校の図書館じゃなくて、真義塾の図書館に、クロヤギ（黒八木浪）と一緒にいるのを、ゼツ（衆舟絶空）が見たらしいぜ。

ってことなんで、逝きますか」

「わたしも行くわ、ボルドーをとちめてやるのよ。さあ、行きましょう。どうせ、旅は道連れよ」

何言ってんだ、この人は、と思いながらも、突っ込む気はさらさらなかった。歩む。再び鎮守の杜のような森に入った。学舎の方へと戻って、正門から敷地外に出なくてはならないから。

午後五時、すっかり暗くなっている。ノーイロはトレンチコートの襟を寄せた。ル・パンも羊革のB3（昔の米空軍のジャケット）のチャックを一番上まで引く。イイヨもキャメル色のダッフル・コートのフードをさらに深く被った。

ノーイロがスマホのアプリ「電灯」を出し、照らす。ランタンみたいだ。自燈明か。釈迦の言葉が泛ぶ。

「気味が悪いな。何か出そうだ。そら、その辺とか」

暗がりを通して、笑いながら、ノーイロが言うのと、

「お〜〜いっ」

背後から声が、

「ひえっ！」

ル・パンが半分冗談半分本氣的に悲鳴を上げた。僕はまた苛立って、

「何だよ」

振り向けば人影、ちよっとギクツとしたけど、よく考えれば人影がない方が怖い。

「おい、どうやら、トリだぜ、たぶん」

ノーイロが言う。

「おい、待てや、おまえら、ファレロンの人よ」

チープなスノビッシュ野郎、グラウコンがアポドロス呼び止めたときを真似しているのか、プラトンの『饗宴』の冒頭の場面だ。背後から呼ばわる者、まさしくそれはトリだった。

僕らに迫いついて、言う、

「袖触れ合うも多生（何度も生まれ変わって生を受けること）の縁えだしだぜ」
僕は、

「いったい、どこから来た、『バツカスの鳶』寮にいたはずなのに、何でそっちから来るんだ、神出鬼没か。因縁生起を説くために」

「べつに。」

おまえらを追い駆けて庵に行ったら、既に人影がなくてな。ただ、それ丈だ、ネバー・モア」

ポー『大鴉』のあの意味は何だったのだろう。いつか、その謎にも挑みたい。真理探究ということほど意義のあるスリリングな冒険は、僕にとって他にない。

いや、今、それはどうでもよい。

「つくづく不思議な人だ。どこで擦れ違ったのか」

「この闇だからな。魔訶不思議であっても、不可思議ではない。さてさて、皆の衆、そんなことよりも」

と、トリは僕の言葉など軽く去いなし、唐突に、差し出す、紙を束ね綴じたもの。

「これが俺たちの自主製作本なのだが」

冊子だった。

「は」

「原稿から製本までやった」

一応、ル・パンが手に取って、

「見事ですな」

「製本をアートとし、それゆえに、倶楽部に参加している奴がいるからな。」

ロン（活字かつじ龍ろん）だ」

僕は思う、そうだろ、奴の家は代々印刷業だ。紀元前三千年頃から、活版印刷をしている。アートの領域を或る意味、超えていた。活字家は王家である彝おみ之家から臣おみとなっている。王族から降って、臣下となった高貴な出自の者たちだ。

「モザイク派の特集版だ」

「モザイク派？」

「物語性否定主義の一派であるアート派、そのアート派の一派だ。美術としての小説を目指す。」

文字のならびを装飾的アートとする一派さ。

言葉も内容も、関係ないとするハードコア派。言葉の意味をモザイク的に配置し、その美を愉樂する装飾派。構造で、知的に表現する構造派。内容や物語と装飾や構造とを愉しむ（二系統の「小説」が同一の場所を占有する）ダブ派（二重、ダブルが名の由来。又は折衷派とも言う）。

それら三つの主流派がある」

「亜流派もあるんですか」

「ある。ま、結局、こちらは一人一派みたいな感じに近いから」

「アート派には他に、どんな派があるんですか」

「コンセプチュアル・アート派とかね。そういった主流派に、ハードとソフトと折衷がある。小説の冊子（物的な存在）をコンセプチュアル・アートとする奴らと、言葉の羅列をコンセプチュアル・アートとする奴ら（彼らは山村暮鳥の『風景』という詩を魁として崇めている）と、って感じでね」

「いろいろと大変みたいだな。折衷派はさしずめ、『キオス島の虐殺』のようなものだろうな、ドラクロワの。ボードレールが美しく評論した」

僕が言うと、トリが初めて侮蔑のない微笑をし、

「そうだ。色彩がドラマを盛り上げ、描写も見事だが、何が描かれているのかわからぬほど離れて見ると、純粋な色彩の交響樂が聞こえるであろうという、それだ。

抽象絵画のような、色彩によるベートーヴェンだ」

残念ながら彼の引用は正確ではなく、彼の思い込みが反映しているが、誰がドクサなくして語れようか。存在は憶断だ。

呆氣に取られているル・パンとイイヨ、眉を顰めるノーイロ。僕は意に介することもなく、

「ふ。お得意の、二重露出か。物語の美と、物語とはべつに言語、又は文字のコントラストやハルモニアの美がある、という訳だ。それらが二重露出的に重なり、交叉する妙味、という……」

と、いう訳で、トリも同行することとなった。何が「という訳」なのか、まったくわからないが。

それを知った上ではないが、偶然にも、

「すべては唐突だ」

とトリは言い切った。

その言葉が発せられること自体が脈絡のない唐突だったが、奇をてらい、異端特異な存在でありたがる彼の性なのであろう。) まあ、人間概ねそんなものだが)

彼としては世界全体を閲覧して発した言葉のつもりであろう。

それはそれで、確かに、間違いではなかった。存在の仕様・構築材料・在り方の由来も経緯も理由も根拠も意味も意義もわからない。

理解・認識というが、理解・認識は既定のエレメントの組み合わせによって、“納得”という心的現象を起こす“化学的現象(ケミカルな反応)”に過ぎない。

実際、思考はインパルス(電気的な発火現象。ニューロン(脳神経細胞)内に特定のイオンが流入することで、細胞内外の電荷の正負が逆転する化学的な現象)だし。

だから、すべては由来も経緯も理由も根拠も意味も意義も不明で、暴力的なほどに唐突である。だが、“非情”・“即物”で、意のままならぬがゆえ、現実性を帯び、現実であると感じられる所以ではないか。

※ただし、ここでは、対象が実際に(何らかのかたちで)“存在”していて、なおかつ、僕らが存在し、感受、又は観受しているという構図が、(確認のしようもないが)事実・真実であるという前提の下、叙する。

この『唐突』は『龍肯』のような古来の原理(アルケー原理)ではない。現代の眞神の天才が創った原理だ。と言っても、『龍肯』の原理と異なるものではない。異なる角度から明晰にしたものであった。

又、べつな唐突を起こし、トリは僕に言う、

「おまえも小説書いてたな」

「書いていたさ。今も書いている」

「何で見たか忘れたが」

「そりゃあ、そうだろうな。僕は、どこにも発表していない。真兮くん(天易真兮)が勝手に、ロン(活字龍)に命じ、僕の原稿を奪って行ったんだ」
あまひらふしろう

「思い出した。限定出版として天平普蕭さんの書肆に、平積みされていたのを、誰かが買って、俺は、それを見せてもらったんだ。誰だったかなあ」

「普蕭さんに頼んで止めてもらった」

「しかし、あの真兮さんが何で、おまえの小説なんかを」

「真兮くんの主著『人間存在の實存的分析による存在論考——空——』はコンセプトチュア

ル・アートだ。

純粋な論理の構築に拠る小説と、小説存在としての小説であることを目指した彼の小説は、真理であることがアートである小説だ。真実アート、アレイティア・アート、リアリティ・アートだ。

変な顔するなよ。

僕の小説もそうだ。曼荼羅のように。言語、又は文字による美術的なアートではない、真理性に拠るアートだ。

それが真兮くんと共通する」

「だから、取り上げてもらった、と」

「僕は、誰にも読ませるつもりはなかった。ただ、作品のための作品だ。売文ではない。解脱後に入滅しようとした仏陀のようにね。僕のところへは、梵天が勧請に来なかったからな。

いや、冗談だ（言う必要もなかったか、そんな顔するな、ノーイロ）。純粋に真理を、芸術性を希求したからさ」

トリは執拗だ。

「じゃ、なぜ、窃盗で訴えない。望んでたんだろ、綺麗ごとを言うな」

「彼への畏敬の念からだ。彼の気持ちもわかるからだ。人類の至宝を埋もれさせたくないかっただけに相違ない。

だが、何よりも、代々真理を護つて来た天易家への尊敬、その中でも、史上最も飛び抜けた存在である真兮くん、万世の師表である彼への崇敬の気持ちからだった」

眞神の誰もが真理の実現者として、若千二十五歳（十四歳の僕が言うのも変だが）の彼を崇めるように、僕も崇めている。我が校の卒業生ではあるが、真義塾の卒業ではない彼を認めた眞神の土壌も凄いと思う。学歴や肩書に依存しては、真の文明も文化も芸術も哲学も、真理もない。進化はない。

生命は進化する。一時的な後退はあっても、結局、進化する。そのベクトルしかない。進化は生命の個体の意識・意欲を遙かに超えた（その最深の奥底にあると言うべきか）義務だ。真実義への意欲も、自己肯定への執著や権力への意志などと緋い交ぜになりながらも、その大本は進化を促す生命の意志にあるに相違ない。

古来の『龍肯』の真実義に加えて、真兮くんは『唐突』と『全網羅』の究竟真実義を眞神に齎した。眞神の精神を昂揚した。高みに至らしめた。大いなる、人類史に燦然たる偉

業だ。この世で最も価値のあることだ。

むろん、『全網羅』の定義については、未だ明瞭ではない。謎が多く、詳らかではなかった。『全網羅』は来年上梓される予定の、真兮くんの新著『アサライ（啊沙羅偉）』に於いて、はつきりするであろう。既に予告に於いて、その評判は確定的である。崇拜のない者など、この眞神にいようか。

同じ天易家でありながら、この畏敬を察しないトリは何者か。世俗的な人間の愚昧さよ、彼らは反進化的だ。

トリはぶっきら棒に言う、

「そうかな。ふ。どういう手を使ったか、どういう絡繰りか知らんが、おまえの頭脳なら、不可能はないかもな。

だが、しかし。ふん。くだらない小説だった。無意味に、つまり、物語的には無意味に、装飾的に哲学用語をならべた、スノビッシュな、くだらない小説だったな。あれも或る種のモザイク主義だ、二重露出的な」

読み取ろうとすれば、どのようにも読み取れる。僕の小説に限らず。小説に限らず。すべての価値は脆弱な足場の上にある。そう思えば、ムキになってまっとうな反論などをする気も起こらなくなった。唇を尖らせ、嘯くのように、

「曼荼羅さ。そういうふう配置した小説だ。文藝曼荼羅だ」

「ふ」

そう言った丈で、トリはもう興味を失ったらしい。追及する気で言った訳ではなく、彼なりの世間話なのであろう。意外なほど、人はいろいろと違う感覚を持っているものである。

その後は、ずっと喋らなかった。

結局、暗い森を一人で歩きたくなかった丈じゃないか？

しかし、今の二人の会話を聞いて、さすがに、ノーイロもル・パンもイイヨも引いたようだ。そりゃあ、そうだろう。自惚れ、誇大妄想、ナルシシズム、……やれやれ。

灯が見えて来た。よかった。闇を脱した。寄港できる。気分はもう灯台を見つけた難破船だった。

建築の魁偉なシルエットが聳える。ここの建物はほとんどが壮大、厳肅、豪壮、壮麗、荘嚴だ。

イマジネーションを掻き立てるものが創造のためにはよいという考え方と、真理は偉大

なる殻に包まれてあるべきというコンセプトでもあった。

校舎を見上げる。半分くらいは窓に灯が見えた。

前庭を廻って正門から出る。

真義塾の中心を南北に走る大路に沿って歩く。北の最奥はここからでも八キロメートルも先だ。ところどころ道祖神や祠があった。水車のある小屋や藁屋根の小屋、靈廟や欧州の田舎のような建物もある。パンテオンや、中華の寺院、古代風の廃墟、組積造の砦もあった。

プロムナード（散歩道）と呼ばれる学園路を往く。並木と街燈。車道と並行して一キロメートルほど行くと、またもや魁偉な影が見えて来た。

真義塾の図書館は独立した建築だ。外観はセヴィーリヤのカテドラル（世界で三番目に大きな大聖堂。一番は、言わずと知れたバチカン市国のサン・ピエトロ大聖堂だ）みたいで、内観はザンクト・ガレンの修道院附属図書館のようであった。天井画やその漆喰の装飾までも。書棚や書見台の深い木の色合いも。天球儀までもが。

大学や高校に学寮があるので、日常的に深夜まで利用がある。今から入っても、特異には思われないであろう。高校の図書館では飽き足らず、ここに来る眞神高生も多い。

「やれやれ。すっかり凍えたよ」

ル・パンがぼやく。

外を歩いている学生はいなかった。叡智の獅子門をくぐり、偉容が黒いシルエツトとなつて蔽いかぶさるように迫る。こつこつ響く石畳を進み、ファサードから図書館に入ろうとした。

「え、そんな」

先頭のノーイロが急停止し、ル・パンが奇声を発し、

「うわっほおー、あれまあ」

入り口の前で、ボルドーとぼったり会った。いつものようにベルベットの暗いボルドー・カラーのシャツに、明るめの鮮やかなボルドー・カラーのネクタイ、波打つ豊かな深い栗色の髪の毛、武骨な牧場コートランテ（羊を裏返したかのように、内側が羊毛で、外側が羊革のコート）だ。

「おい、何だよ、こんなところで会うか」

ノーイロの声にボルドーは驚き、

「お、ここで会っちゃ、おかしいか」

「そりゃあ、そうだと、ボルドー。探しても会えず、もう会えないかと」
さすがに僕も苦笑し、

「おい、それは大袈裟だろう。で、どうして図書館へ？ クロヤギは？」

「調べてるよ」

「何を」

「矛盾した数式について」

「何だ、もう見たのか」

「どこにあるんだ」

「イイヨは怒り出した。」

「私を待ち惚けさせて、何なのよ、そっちを優先したの」

ボルドーは辛気臭い渋顔を顰め、素直に謝った。

「いや、ごめん、クロヤギがあまりに真剣で、鬼気迫っていて」

「点数ヤバいんだな」

ノーイロが薄笑いを浮かべて言った。

「そういうことでもないらしい」

肩を竦め、ボルドーはそう応えたが、理由は言わない。僕には関係もない。

「じゃ、何で」

と質すノーイロを僕は制し、

「とにかく、見たい。それが先だ。他はどうでもよい。」

詮索は無意味だ。クロヤギのことは、単に性格だろう。奴はストイックな探究者だ。求道者と言ってもよい。どこことなく、サバト的だが」

「そうかもな、じゃ、まあ、見に行くか」

なぜなら、再び校舎へ戻ることを意味するから。矛盾した数式は校舎にある。ノーイロはうんざりした顔だった。

そんなことを意にも介さぬイイヨが詰問する。

「サバトって、何よ」

ノーイロがうんざり面で応え、

「魔女が土曜の夜にやる宴だ。ゴヤの絵を見たことがあるだろ、黒山羊の姿をした悪魔が真ん中にいる」

「あゝ、あれか。プラドには行ったことがないのよ。で、何なの、それが。ねえ、どうだ

っていいわ。

さあ、ボルドー、連れて行ってよ。さっさとね。罪滅ぼしだと思って。わたしも見たいわ。案内してよ。ねえ、もう一回、行くのよ」

マドリッドのプラド美術館に行ったことがないことがサバトを知らないことへの言い訳になることはないと思いがちながらも、人は皆、ただ言い訳をしているだけなのさ、と自嘲し、かつ考えつつも、サバトの絵がプラドにあったような記憶がないと思う。

「わかった。わかってるよ、そうさせてくれ、謝るよ、イイヨ」

何と僕らは再び高校へ。最悪だと罵りながらも、プロムナードを歩く。正門から入り、普通教室棟の裏に回った。

目立たない場所だ。

何となく、神経を逆撫でる磁力のような、誰かにじつとにらまれているかのような、異変の雰囲気があった。

ノーイロが電灯アプリで照らす。

壁面の微かな傷でしかない。単純な細い線だ。僕は古代の呪文のようだと思った。しかも、禍々しい感じを覚えた。

何だろう、呪詛のような。いや、バカらしい。バカバカしいが、この感じは確かにある。感じて、何だろう。人は、なぜ、五感に映えないものを感じる取るのか。その実体は何だろう。これも存在の一種であるには相違ない。

ノーイロは身をかがめる。

「あゝ、これか。薄いな、だいたい風雪にやられている」

ル・パンは顔を壁につけて横から眺め、

「はーん、化粧の上から、釘か、何かで引っ掻き削った感じだなあ」

「実際、明るい時間帯でも、自分独りだけで見た時には、なかなか見つからなかった。ユーライの言葉を疑ったくらいだ。」

言われなきゃ、誰も気がつかなくてもおかしくない、こんな感じだが、ユーライ曰く、知る人は皆、知るらしい」

「だろうね。知る人が皆、知らなかったら大変だ」

そう言いつつ、僕は拡大鏡を出し、見た。いつでも持っている。

「ホームズみたいだ」

「うるさい、黙れ」

却説。

$$\Omega = \{y\}, \quad y \notin (A \cup (U \setminus A)), \quad \Omega = \{x\} \wedge \Omega \subset A$$

異様なものを感じながらも、何となく、美しいなと思った。理知でしかない厳密学である数学に、異様さを感じるのは可笑しいだろう。しかし、感じ、その上に凜々と透る清冽な美を覚えた。

装飾としての文学、デザインとしての文学。そんな言葉が頭を過ぎったが、この眼の前の現象との関連はわからない。脳髄は一つの自然であって、勝手に想起する。そう思えば、論理だの理性だの概念だのと言っても、雨や月や潮の満ち引きのようなものである。

飽くまでも、僕に見えたとおりに「勝手に想起する」が現実であるとしたならば、という前提の下に限定した上での話だが。つまり、現実が見たままであるとは限らない。デカルトも疑ったが。

ノーイロが問う、

「ジャクニ、何だ、これは。何が書いてあるんだ」

「あ？ 何を問うのか。見たままさ。集合の数式だよ。

$$\Omega = \{y\}$$

Ω は、 y という元しかない集合。

$$y \notin$$

元 y は、属さない。

$$(A \cup (U \setminus A))$$

集合 A と、全体集合 U から集合 A を除いた集合 (A) との総和に。

$$\Omega = \{x\}$$

Ω は、 x という元しかない集合。

$$\wedge$$

かつ

$$\Omega \subset A$$

Ω は、集合 A の真部分集合。

なるほど、見事に矛盾だ。論理的には、間違いなく、間違いだ」

「いや、だから、これが哲学の問題になるのか」

そう苛立つノーイロに蔑みのまなざしをわざと投げる僕は、

「あり得るだろうね」

「どんな問題だ。いや、今すぐ具体的に、わからなくてもいい、いいけど、これは何系の問題になるんだ」

僕が即答を避けると、ボルドーが口を挟む。

「クロヤギがそれを調べている、今」

「えー、すごい。わたし、何調べていいか、見当もつかないわ」

僕は憐みの笑みを泛べ、

「ふん。そうでもないさ。そうだな、いや、わかったよ。じゃ、共同戦線だ。僕らも、図書館へ行こう」

「またかよ」

今度こそノーイロは大声で呻いた。構いやしない。

無駄も無為も恐れはしない。タフに続けてこそ現実の道は開ける。風雪に耐えて地道に何度も繰り返し返す。鍛える。このストイックなイメージが好きだ。鍛錬とは、僕にとって、叩くことでしかない。

さて、共同戦線と言ったが、試験問題の予想をするに当たっては、生徒同士が協力し合うことは禁じられていない。わかった結果を教えることも、教えられることも。哲学の問いだから、である。決まった答えなどないし、極論を言えば、問題が漏洩しても、参考書や資料などから答が探せるような類のものではない。だから、話し合うことや教え合うことなど、支障ない。

むしろ、それで学習が深まる。デイベートのようなものだ。繰り返し対話して深めていく。古来変わらぬ手法とも言えた。

ル・パンが震えながら、

「え、戻るのか、いや、行くよ、寒い、どっちにしろ、早くしようぜ。マジで寒過ぎ。凄エ底冷えしてる」

「あ、雪よ」

「粉雪だ」

僕は念のため、訂正した。そんなことを言っているうちに、ノーイロは先に歩き出す、速足で。手のひらを反すようにというこの模範はこれだと言わんばかりに。

「さ、行くわよ」

イイヨが言うと、ル・パンも「あゝ、言われなくとも、行くさ。ふ、ぶるっ」

ボルドーに肩を竦めて見せる。それを合図に僕らも駆け出した。走れば暖まるかと期待

して。無我夢中、我武者羅に。

風景は走馬燈、この辛い時間も、いつかは終わる。時間が解決してくれる。少なくとも、最後は死で。

プロムナードを往き、叡智の獅子門をくぐると漸く人間らしい気持ちに。さっきまでは修羅だった。

ファサードを抜け、立派なエントランスを通過して、閲覧室、書見の間に入る。三階吹き抜け。僕は見廻し、

「ボルドーよ、クロヤギは、どこだ」

指さし、

あまやすぶんこ

「天易文庫だ。真兮氏の最新の草稿も保管されている」

僕は思わず唸った。

「本当か、ううむ、その手があったか……」

たとえば、哲学者フッサールの草稿は死後、フッサール文庫に保管されている。

同様に、天易家も代々自家の校倉に、ヒエログリフの書かれたパピルスや楔形文字の粘土板やフェニキア文字の羊皮紙やサンスクリットの貝多羅葉や甲骨文字の甲羅などなどの古文獻・古文書や逝にしへの草稿、古代人のメモ、同家伝承の各種資料や雑記、スクラップ・ブックなどを保存していたが、自家の校倉がいっぱいになり、真義塾の図書館に附属する文書館へ寄贈、真義塾が収蔵することとなった。

それが天易文庫である。

特に、真兮くんは生きている今のうちから、自分の草稿を複写し、文庫に預けている。オープン・ソース的な考えだ。

「待って」

僕はボルドーが閲覧の手続きをするためにノートパソコンのマウスを動かしている手を押さえて止めさせた。

「ちょっと、この閲覧記録を見て」

「え」

僕らの前にクロヤギがいる。当然だ。その三時間ほど前に二年生のタロ、ジロ、シローが。同源家の三兄弟（三つ子）だ。

「なるほど、二年生なら、ユーライに訊かなくとも、場所がわかる可能性がある。そういうことか。」

三年生たちなら、もう、何年も前から見知っているかも知れない」

ル・パンがずっと黙ったままのトリ（渡したい物を渡してしまったので、既に関心がないのか、ならば、なぜ、尾いて来るのか）を振り返り、

「どうなんすか、先輩」

「俺は何も知らない。たぶん、ほとんどの奴ら、知らないんじゃないか」

あまり当てにならない。人は周囲の五、六人が言うのと、「皆がそう言っているよ」と言う生き物だ。さつきから黙って尾いて来ている丈の上級生のどこを当てにできるのか。むろん、できない。

だいたい、このパンク野郎は、なぜ、尾いて来ているんだ。不要な登場人物だ。何の役割もない、何の見識もない、何の哲学的優越性もない。

場に合っていない安っぽい飾り物だ。

違和感すらない。薄っぺらで。

ありふれた空き缶だ。ただの存在だ。或る意味、侘び、寂びだな。高麗茶碗も室町末期は李朝のただの雑器だったが、侘茶の道具として見立てられた。外国の、何でもない雑器、風情と空想とを誘いつつ、紛れもなく、「凍え」「冷え」ていただろうな。

トリは、僕にとっては、そういった類のものらの、遠い、遠い親戚なのかもしれない。中身がなくて、カラカラと乾いた金属音を出す品物だ。つまらないもの、パンク。まあ、それが正統派のオリジナル・パンクなのかもしれない。ピストルズは好きだったな。

演奏テクニクもない、歌詞もよい訳じゃない、彼らがなぜ偉大なのか、説明できないが、彼らは偉大だった。それは論理を超越している。

リバプールの四人組がたまたま天才の集まりだった訳じゃないのと同じだ。時代とさえば、安易だが、何か力が働いている。ミック・ジャガーはケミカルな反応だと言ったが、そうとも言える。

それはミツバチが蜜を探し、花が花粉を蜂に運ばせる力と同じだ。生命の進化が方向性を持って進むように。生命が常にベクトルを持つように。

いけない、また夢想してしまった……

ノーイロが怪訝な顔で、

「なあ、なぜ、天易文庫なんだ」

僕はやや呆れた。

「ユーライは天易家の系統だぜ。真兮くんの最新の思想に触れる機会がある。真兮くんの

思想は現代の眞神の中心思想であると言ってよい」

「まあ、そりゃあ、そうだが」

「ともかく、急ごう。話す時間がないし、思考の経路を最初から順を追って説明するのは面倒臭い」

「わかった。じゃ、三年なら、見に行かなくとも、知っていた可能性もあるな」

「だから、急ごう」

廊下を廻って、普通教室四部屋分もある天易文庫に入る。見上げるような移動書庫が四十四台あった。古今東西和漢洋の膨大な蔵書、文献群である。久々に来たが、歴史の存在に圧倒された。

クロヤギは同学年だが一つ歳上だ。留年していた。今、浮彫がある古い書見台に肘を突き、考え込んでいる。劇的な陰影を帯びていた。典型的な“優秀なのに、気が利かない”タイプだ。僕はファストを連想した。見た目はメフィスト（メフィストフェレス）なんだがな……………

「やあ」

僕らは声を掛けた。驚いたようで目をぱちくりさせていたが、やがて、僕らのうちに、ボルドーがいるのを見つけて、

「いったい、これは」

「旅は道連れさ。仲間は多い方が良好だろ。旅の仲間だ」

意外にトールキン好きか。僕らはホビットじゃない。まあ、似たようなものか。中つ国を旅している。

「僕らもその誤った数式を見てきたところなんだ。共同戦線で行きたいのだが」

「そうか、異論はない。心強いね、秀才のジャクニがいれば」

「おい、おい、俺たちや添えもんか？」

「違ったか？」

僕はそう言って再びクロヤギに向き直り、

「どこまで行った？」

「いや、さっぱりだ」

「だが、あの数式は『全網羅』としか思えない」

クロヤギは少し落胆の顔をし、

「あゝ、しかし、最新の草稿群には記述がなく、いやはや、まったく膨大な量で、辟易し

たが、ともかくも、そんな感じだ」

「これ丈の量だからなあ」

僕は言いながら、眺め回す。何かヒントを。う、ううむ……

ノーイロが訊いてきた、

「ところで、その『全網羅』とやらは、いったい、何だい」

「何だい、って、何だい」

「何だいは何だいだ」

「問いを問うている。」

人は問うて検証するが、問いは検証されたことがない。

懐疑を懐疑する。

ウロギロス

その果てには、何があるのか。原蛇の原理だ。自らの尾を咬む蛇の太極円環図だ。メビウスの輪（又はメビウスの帯）のような。

自らの尾を咬み、自らを喰わんとする蛇は、喰らっているのか、喰らわれているのか、又喰らえるのか、喰らえないのか」

「まったく、わからんな。そんな御託に何があるのか」

「おまえは既に言ったよ」

「何を」

「答を」

「は」

「何だいは何だいだ、って、おまえは言った。人類は最後には、それしか言えない。それだから、それだ。としか言えなくなる。論理に遵う限りに於いては」

「それがどうした」

どうやらノーイロは論理に遵う気はあまりないようであった。僕は言う、

「トートロジーだ。懐疑を尽くせば、その果てにあるものは、同義反復だ」

「同義反復、つまり、何の説明にもなっていない、って言いたいのか。畢竟、何事も根拠がない、って。」

あたかも、忽然と、*“愛想”*もなく、いわれも経緯もなく、唐突に、端的に現前しているかのようだ、と。堪らんね。ふ。

おいおい、それは、『唐突』だろ。俺は『全網羅』を知りたい」
ノリツツコミしてる場合か。

「同義反復は空疎だ。空っぽだ。それは最も大きな、いや、無際限な器だ。すべてを網羅する、……いや、そうじゃない、……訳でもないが」

「何言ってるんだか、ようわからんが、まあ、そういうことか。」

なるほど。すべてを網羅する無際限、それが『全網羅』なんだな」

「違うだろ。すべてを網羅したら、〃一つしか網羅しない〃ことを遺漏してしまう」

「〃すべてを網羅する〃と、〃一つ丈を網羅する〃を併せて網羅するのか」

「それでは、〃すべてを網羅する丈〃、つていうことを網羅していないことになる。同じく、〃一つ丈を網羅する〃を、やはり、遺漏する」

「罅が明かないなあ。」

つまり、空疎ってことか」

「空疎は、空疎ではない。」

空疎という意味があるから。

意味は偏りだ。すべての意味は一定の意味を持つから。

意味は一方向だ。四方八方を向いては意味にならないからな。

けれども、本物の空疎には偏りが無い。四方八方だ。すべてを網羅する」

「何か、見えてきそうで、見えてこないな。歯痒いぜ」

「あゝ、そうだな。何かが見えそうなんだけど、ほとんど、見えているような気がするのに、見えてこない」

クロヤギは黙って聞いていたが、

「見る角度を変えよう。『全網羅』は何の役に立つのか」

そう言った。

だが、僕はアンニュイな口調で否定する、

「『全網羅』だぜ」

俯き加減、少しばかり恰好をつけているかもしれないが、まあ、べつに、どうでもよい。

「じゃ、何で勉強するんだ」

「勉強もできない」

「じゃ、俺たちは、何をしているんだ」

「では、逆に問うが、おまえ、何で生まれて来たか、何で生きているか、正確に答えられるか。」

適当に答えることはできるかもしれないが、証明方法があるか」

「そりゃ、無理だよ。なるほど、そういうことか。『全網羅』って、或る意味、現実ということそれ自体ってことだな」

「そうだな、現実が『何者』かなんて、誰にもわからないが、皆精一杯、生きてる。それしかない」

「眞神古来の教えだ」

「そうだな」

“人、堂々果敢すべし。

人、義しきと以^{おも}ふを爲す善し。”

「普通に生きろってことか」

「誰でも、それしか選択肢はないだろ」

「平常是道^{びやうじやうぜうだう}って奴だな」※道とは、仏道。平常心是道とも。平常心は囚われない、ありのままの心。

「何だ、それ」

「平常さ。ありのまま、殊更でもなく、普通でもない、ただの素のまま、ただの。だが、平常を心懸けては、平常にならない」

「あゝ、わかった。平常を心懸けては素心ではなく、妄想だという訳か。だからと言って、心懸けなくても、それも意図的だろ。平常とは言えないな」

「どんなかたちであつても、どこにも落ち着くことができないのね」

「なるほど、ウロボロス構造だ。『全網羅』と同じ雰囲気を醸す」

「うん」

「それは、それで、結構だが、試験問題と解答は」

誰も何も言わない。当然だ。応えようがないからだった。図書館の古い書棚も黙っていた。

「ありとしあらゆる書類や蔵書類を涉猟しよう、何かヒントがあるかもしれない。それも、行動のうちだ。足で稼ぐしかない」

自信はなかったが、そう言ってみた。焦っても、時間ばかりが経つ。結果的に、僕とクロヤギ丈で探しているようなものであった。トリなんか、坐ったままでまったく動いていない。こいつは何のために来ているんだ？

「おい、午後九時だぜ。空腹だ。帰ろうぜ」

ノイロがそう言った。これといって大したこともしていないから、余計に長く感じられるのだろう。早くも、トレンチを片手につかんでいた。

クロヤギは文献に埋もれ、文献カードに細かい文字を書き込みながら、まだまだ帰りたくなさそうであったが、僕も帰る方が良いと考え、彼に帰ることを勧めた。

「仕切り直そう。それも又、実践な生き方の要領の一つだ。このままでは、効率が悪い。歴然だ」

「つてことさ。じゃ、行くぜ」

ノーイロは歩き出す。

イイヨが怒って、

「待ってよ、勝手なんだから、片づけなよ」

「そうそう、片づけましようや、それが義理ってもんでさあ」

ル・パンがノーイロの肩を叩く。こいつは悩むことがあるのだろうか。いや、悩むだろうな。人は皆想像を絶する。自分の基準で判断すべきじゃない。ましてや、この僕の基準では。

「片づけたら、行こう、クロヤギ」

ボルドーは文書を戻し、ランチ・コートを羽織った。

諦めた表情で、クロヤギもチェスターフィールド・コートを着た。

エントランスから出ると冷たい風が頬を打つ、再び。僕が書く小説なら、撃つと書きたいぐらいだった。

「ひゃあ、さっきより冷えてやがる」

ル・パンの声に、ノーイロが、

「だから、さっさと逝くぜ」

先頭になって闇に切り込む。雪と風に逆らいながら。ル・パン、僕、クロヤギ、イイヨ、ボルドー、トリと続く。

「酷い寒さね」

「あゝ、遭難しそうだ」

「取り敢えず、学食に行こうぜ、熱いスープだ」

吹雪のような気候になっていた。街路灯を頼りに、くるぶしまで埋まる雪をザクザクと進む。歩む僕ら皆、寮生であった。学寮に帰る。一人一部屋、独房とも呼ばれていた。真義塾への進学準備学級に属する者は、強制的に寮生活なのである。

真義塾は大学ではない。一条校でもない。我ら民族のアカデミアだ。又は我らがリュケイオンである。眞神独自の真義探求のゆえ、国から認可されないのだ。附属高等学校につ

いては、辛うじて認可されていた。附属小中学校も。

それでも、眞神族の人間は真義塾への進学を最高のステイタスとする。就職にも、困らない。産業もない片田舎なのに、職はあふれんばかりにあった。ありていに言えば、就労しなくとも、生活が成り立つのである。

眞神は古来、富裕の土地であった。伝承によれば、渡来した時、数次に互^なって、累計数千隻の船に載せていた財産の価値は、西暦二〇二一年現在の換算で、九千那由他^な（那由他は一〇の六〇乗）ドル超という、途方もないものであった。

西暦五八八年の火々禽の柵^き（城）の戦いで大和朝廷に敗れて以降、国家予算を凌ぐ朝貢をすることで、経済的な「特別区」として認められ、明治政府もそれを継承し、GHQもこれを認め、現在に至っている。

学生食堂は学寮に附属していた。点灯しているシャンデリアは三分の一くらいで、フレスコ画やモザイク壁画、暗鬱な赤の緞帳、檜のテーブルや燭台など、古色蒼然たる家具類が多いせいもあり、全体が深い色合いに沈んでいた。

皆それぞれ選んだ料理のコーナーから、好みの食事をトレーに乗せ、一つテーブルに坐る。半ば昏いシャンデリア。

「最後の晩餐みたいね」

「見たのかよ」

ノイロがからかい気味に突っ込むと、イイヨは、

「ダ・ヴィンチの壁画なら、ミラノにあるサンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会の修道院で見たわ」

「ふーん」

不満気に唸って、興味をなくす。イイヨがくすつと笑った。

「ふう、満腹だ。エスプレッソを取ってくる」

そんなことも気がつかず、ボルドーがそう言って立ち上がると、

「ついでに俺のために、抹茶を」

「じゃ、俺はカフェ・オレかな」

「アールグレイを頼む」

「俺はギャルソンか」

「あたしも行くわ、みんな、自分で取りなさいよ」

各自取りに行く。僕はシヨコラを取った。

僕は食後も、エントランスにある暖炉の間で、白樺の香りに浸り、ソファに深く沈みながら、話し合ったが、何も得られず、ル・パンが、

「眠過ぎ。寝ようぜ、零時を過ぎたよ」

眼が冴えて仕方ない僕は部屋に戻って、考えの続きに没頭した。

皆には悪いが、僕には見えている。

不合理な数式、答がない、解決しない、ただ、現実であった。

ベッドに寝転がる。

天井を見た。

現実？　だが、それが何であるか、確証はない。だが、確証とは、何か。なぜ、確証がないと、ダメなのか。確証があれば、なぜ、よいのか。なぜ、このように問うのか。問うて、解が得られれば、それがよいことなのか。問いとは、何か。しかし、それは問えるものなのか。

現実には現実だ、何もなくとも。いざ、生きめやも。

自動的に、無意識に、本を選び、手に取って開く。ページをめくる。

龍峯寺の僧 龍鳳が著した公案録「叙無記」。その肇輯第十七段にある、真巖と龍鳳の

対話を読む。

しんいわく

真曰、このふみのこころ
いづくにしあるとも
くきやう(究竟)なり

りゅう

龍曰、かんす(卷子) みなおなじうくきやうならずや

真曰、このふみくきやうのゆゑん

「この文の意がどのような内容であろうとも、この文は究竟である」

「ならば、すべての文は究竟ということになってしまわないか」

「それこそがこの文のみが究竟である理由である」

なぜ、この書物を手に取ったのか、わからない。摩訶不思議の力が働いていたのか。何か自然の摂理なのか。生命が生き残る術を見出す勘のような。

この文も矛盾だ。

内容がどうであろうと、究竟であるとは無茶な話だ。

ならば、何でもかんでも究竟だろう、というツツコミは当然だ。

むろん、そのとおりだと、その批判を是認することを前提として、それがこの文のみが

究竟である理由であると言っているのである。

これは『全網羅』だ。

すべてであることと、個であることとを、遺漏なく、網羅している。

あの数式に通じている。あの数式はすべてでないことと、個であることとを網羅していた。

$$\Omega = \{y\}, y \notin (A \cup (U \setminus A)), \quad \Omega = \{x\} \wedge \Omega \subseteq A$$

真究竟真実義はすべてを網羅し、遺漏がない。それゆえ、すべてを網羅しないことを網羅する。それ丈を網羅する。また、同じ理由で、一の者しか網羅しない。

もし加えるとすれば、次の式を加えれば、より鮮明であろう。

$$\Omega = (A \cup (U \setminus A))$$

Uは全体集合ゆえ、 $\Omega \equiv U$ だ。遺漏なき一切ということだ。だが、すべてを網羅しないことを網羅していない。一の者しか網羅しないことを網羅していない。

だから、三つの集合を満たす真究竟真実義 Ω ならば、すべて丈であり、一個物丈の存在であり、一切ではない丈である。『全網羅』だ。

恍惚が僕を襲った。成層圏をも超え、遙か数億光年の彼方、天空の涯、大いなる崇高の陶醉だ。一切を数千億光年の高みから俯瞰するような超越的な感覚。烈しい燦々たる光、昂揚と解放、軽やかさ、無際限の静寂、あゝ、時が止まった。解脱だ。

これを伝える言葉がない。

そもそも、伝える仕様や、伝え方があり得ない。

だが、解決にはならない。

第二章

十二月一日の金曜日、放課後、僕らは話し合った。三年生はかなり進捗しているらしいという情報もあった。二年前から継続して文庫を調査しているグループがいくつもあって、

ユーライの発言と絡めて、問題の予想を立てているらしい。そのうちの二、三は天易家に直接リサーチに行っているとのことだった。やるなあ。

焦りを感じた。

さらに眞神族の聖地、眞神山へ赴いたグループもあるという。そういう動向の意味を僕は分析した。得られるものは少なかった。

討議を重ねるも虚しく、

「眞神山に何の意味があるんだ」

ノーイロは言う。僕には何となく、わかった。

論理は究極まで逝っている。懐疑の果ての涯、限界まで、極北にまで到達していた。農業革命や産業革命、IT革命の次に来る新たな異次元への革命、知覚の扉を開くのかもしれない。新たな進化への道標、これほどの冒険は、もはや存在しない。

だから、脱論理的なxへの跳躍が、超越的な次への展開が必要なのだ。だが、むやみに言葉にする気にはなれなかった。言えば、壊れてしまう。そんな気がした。

「何か考えは」

ノーイロが再び発言する。

しかし、誰もがお手上げのようだった。僕丈が気づき始めている。僕は自分の気がついたことをうまく説明できないと感じていたので、黙っていた。隠していた訳ではない。解脱直後の仏陀の気持ちがわかる。少なくとも、そう感じている。

彼に関してわからないことと言えば、解脱の直後は、入滅を欲していたのに、その気持ちを変え、布教をするに切り替えたことだ。それ丈である。梵天勧請というドラマが実際にあったのか。それに相応するような、超越的なドラマがあったのか。

わからない。

幼い頃なら一笑に付したであろう。しかし、今の僕には、リアルだ。人の常に言う現実とは、捏造ですらない。

論理はもはや手段ではなかった。超越的なものを探る。

翌日の土曜日、僕は古墳を目指した。

天之家の本家の周囲は先祖の古墳だらけだ。

本家一族郎党の墓が広大な水田の中にあるピラミッドのような丘の鬱蒼たる杜から、蒼古な風貌をわずかに見せている。だが、いくつもある家の、それはほんの一部で、しかも、角度がよければ見えることがある、という程度でしかない。

注意深く観察しなければ、ただの丘と常緑の籠れ上こもがる繁りのみであった。

長い畦道を渡って、中に入れば、様相は一変する。苔生こけむした厳めしい野面積のづらづみの石垣が聳え、中央に石段がある。左右から石垣が挟む傾斜のきつい段を上ると、組積造やくらの櫓門があり、鬘たてがみなび靡なびかせる獅子の石像群がならんで、寄せる者を威嚇した。

櫓門の両側には、天之家本家の櫓門一族が屋敷を連れ、それはぐりと丘に環をするかのようにならぶ。

門をくぐって、巨石の壁に囲まれた石段をさらに上ると、スフィンクスに似た『叡あかき獅子』の石像が左右にある。深紅の獅子の紋章がにらみ下ろす、大手門が立ちはだかつていた。

櫓門一族と同様に、紅獅子門一族が胴巻きのごとく環状にならぶ。

それをくぐると、柵状の石垣に囲まれる場所があった。石垣の上には胸壁があり、楼閣うちこみを備えた第三の門が正面に見え、楼門一族が邸宅をいならべる。この辺りの石垣は、打込接はぎという加工法が用いられ、石がある程度、形を整えられ、野面積のように角の丸い自然石を積んだ丈の石垣のような隙間がなく、間詰石もしっかり入っていた。

楼門きりこみをくぐると、またもや荒々しい巨石が狭む石段である。ただし、この辺りの石垣は切込接きりこみという加工法を以て、幾何学的に整形され、ぴつたりと隙間なく嵌まっていて美しかった。

石造りの高麗門があらわれる。

東照宮の陽明門のような繁縟な装飾に蔽われていた。その門の向こうに、漸く木造の大きな古民家があらわれる。天之大本家であった。丘の頂で、あたかも、ここ一帯が天守閣のようである。

視線を転じ、丘の周りを見渡し、広大な水田を海と見做せば、泛ぶ島嶼のように、又は丘を囲む衛星のように、濃緑の膨れ上がった杜が複数ある。天之の有力な分家の屋敷であった。

他にも、分家の群島と見分けがつかぬ、樹木の盛り上がりが数百ある。それが古墳群であった。その数は往時の権勢を偲しのばせる。

僕の今日の目的はそれだった。我が一族と思えば、樹木の暗き土盛も、悠久の歴史の奥深い古薫として感じずにはいられない。

愚かとは思った。生命には、自己肯定の方程式が組み込まれていて、どうしてもそういう演算をしてしまうものとは知りながらも。

さて、天之家が、眞神の民族となったのは、眞神の王族である彝之家がエジプトに遷都した、今から八千年前の紀元前六千年頃のことであった。それ以前は上エジプトから東アフリカまでを移り住む民であったと聞く。謡によって口伝のみで、そう継承されていた。真理奥義に通じた集団であったが、眞神の真究竟真実義に感銘し、永遠不滅の誓いを立てたという。

僕は畔を涉って、中規模の古墳の前に足を止めた。じっと見る。まずは、エポケー（判断中止）を行った。僕らは見えるものを実在していると、無条件、無意識的に確信している。それを一度、捨てて、観察した。

古墳、埋葬、歴史、祖先の霊、盛り上がり、匂い、空気感、樹木、柱形、直線、曲線、緑、茶灰色、乱反射、かたち、それらを次々と解体する。

それは同時に、実在に直截参入することをも意味していた。僕はセザンヌが言うところのサンサシオンを捉えようと努めた。或いは、合理的な感覚の濫用をも垣間見た。

木が木に見えるのは僕らが木という企画を企投しているからか。アイデアがどこからやって来て、僕らの脳髓に天降ったのか。

それとも、単細胞生物の時代からの経験が積み重なって、遺伝子に残されたか。

実証科学主義の時代、それが一番尤もらしいが、それをどうやって確認することができなのか。

すべては企投の結果、作り物、捏造か？

リングが林檎に見えるのは、リングが私は林檎ですと名乗るからではない。

時間と空間の中に存在するリングだが、空間と時間は人間の持つ意識の仕方で、蜥蜴やカエルにはない（と、断言はできないか……）。人間はア・プリオリに持つ意識の仕様の限界内で、世界を構築する。

人間のうちに先天的に内蔵されていた企画を投じ、世界を構築するのだ。この解釈は構築主義とも言うべき解釈である。

すなわち、自分が欲しいものを自動的に投げ込んでいるのだから、自分が見易いものが回収できるのは当然という訳だ。

イマヌエル・カントが提唱した説で、世界が在って、人がそれをそのまま意識するという構造ではなく、人間の持つ仕方で、世界を構築しているという考え方だ。『現象』というものである。

この逆転の発想を、カントは「コペルニクスの転回」と称した。

僕らが現象を見ているとすれば、真実を、あるがままに見ていると断言できるか。対象は本当に眼の前にあるのか。

客観的なものの存在が実在であることを証明する方法は何だろう。

見えるから？ 聞こえるから？ 匂うから？ 美味いから？ 触れられるから？ 暖かいから？ 冷たいから？ 心地よいから？ 痛いから？

感受されていることが対象の実在を証明することになるのか。何だかの起因があるというか。その証拠は？ 原因があるから、結果が在るはずだというドクサの証拠は？

客観という定義を、その定義が実在することを、定義の仕様が妥当であるか、その輪郭が正しいかを確かめる方法はあるか。

五感の妥当性が未証明のままでは、一向に進めないのではないか。

それなくして、主観が客観的な在り方にある対象と対峙しているという構図を、どうやって証明するか。

僕らは知っているつもりだ。

だが、自分で確かめた訳ではない。古代の民衆が呪い師の言葉を鵜呑みにしたように、科学者の言葉を鵜呑みにしたに過ぎない。原始の人々が迷信を抱くのと、構造的に変わらない。

すべては名もなきもの、そういう名すらもない。かたちはあっても、かたちなどない。かたちとは、何か。

だが、それでは生きられない。

いざ、生きめやも。

だが、風は吹いていない。

さて、僕は何も得られずに引き返したが、何かを感得したような気もしていた。

仏陀は悟った内容をどのように伝達したのだろうか。

聖八正道や四諦、中道（中正の道。中国の中庸とは違う）などを説いたという伝説であるが、記録のない時代である。在るとすれば、口承だ。何も確かではない。

そもそも、彼は解脱直後、死を欲していた。

わかるような気がする。人は超常的な絶頂の満足を覚えた時、もう、死んでもよいという感覚を抱くものだ。その何千倍も強烈な不死なる解脱の歓喜ならば、死を欲することもあり得ない話ではない。

為すべきことを成し、一切の意欲が充たされ、煩わしい生存へと戻ること、再び染まる

ことを厭離したのであろうと推察する。

又、彼は自分の得たものが甚深微妙で、世の人には理解し難いとも認識していた。なぜ、理解されない教えを説き始めたのか。伝説は梵天が法を転ずる（法の甘露を説く）ことを釈迦に勧請したという。

僕がそれを口にする、

「おまえ、本気で言っているのか」

ノーイロが呆れ顔だ。僕は平然と言った。

「梵天勧請は、本当にあったことなのか、と言ったまでだ、べつに、そんなに驚くか、普通」

「驚くわい、誰が今さら、そんなことを問うか」

「すべては未解釈、理解は納得という心的な現象に過ぎない、未定、謎のまま、唐突のままだ。

把握してると称するが、掴んでいるかたちの輪郭線が、どこから来て、どうやってそのように定められたかを知らずして、いったい、何を解するというか。梵天勧請程度のこと、在っても、不思議はない」

「わかった、わかった、だが、それも一つの把握じゃないのか？ まあ、もういいよ。わかったよ。

それはいいけどな、おまえ、哲学のテストは、どうでもよいのか」

「もちろん、探求している。

今、やっていることは無駄ではない」

確証はないが。

ともかく四六時中、考え続けた。脳髓が熱を持って、目眩がするほど。

喫茶去庵に寄った。誰もいなかった。戸締りなど、野暮なことはしていない。

茶杓が茶碗に掛けて擱いてあった。誰かが先程まで居て、中坐した感じであった。

杓は竹を切ったもので、竹の節折れが中頃に来るように拵えられ、蟻の腰のように折れて見えることから、蟻腰の見掛というものだった。

何かを得られたような気がした。

ふと思ひ、なるべく零に近い地点から考え直そうと、眞神の歴史を顧みた。

眞神族の発祥は紀元前五万四千年以前に遡る（古代エジプト人の祖先が現在のエチオピア連邦民主共和国、スーダン共和国あたりから移動して来たのが紀元前三万五百年頃、定住が紀元前

一万二千年頃と言われる)。

長い間、後世の文献資料のみで、伝説の域を出なかったが、最近、南アフリカのナミブ砂漠の洞窟で真神文字が発見され、その顔料に使われた植物の分布年代と、生贄と思われる動物の遺骸の痕跡から、放射性炭素年代測定により、その年代が確認された。

なお、真神文字が記した内容は、神へ真実を奉納すること、及び真実を伝播することを誓うものであった。彼らは飼育や栽培以前に叡智の輸出を行っていた。

ナミブ砂漠は世界最古の砂漠であり、ナミブとは、その地域に住む人(サン人)の言葉で、「何もない」という意味である。サン人は遺伝子解析の結果、人類の祖先、最古の人類とされている。

真神族はその後、紀元前一万八千年頃から牧畜を始め、紀元前一万四千年頃に農耕を始めた(古代エジプト人ですら牧畜が紀元前一万年頃、農耕が紀元前八千年頃)。

ナミブの時代、真神族は現イスラエルのガリラヤ湖岸から大麦やライ麦の栽培を学んだ。当時から既に各地域と交易していたのだ。真神族の最初の産業は牧畜でも農耕でもない。貿易業であった。彼らのエジプト移住の理由の一つは、農業革命への歴史的参加である。

しかし、一時期、農業をやめている。

「人間の家畜化からの脱出」

生存と繁殖を生命の原理と考えれば、麦は大立者だ。一地方の草でしかなかったものが、今や世界中に繁茂する。

逆に、人はどうか。

計算可能な、安定した食糧生産の方法を得て、計画的に余剰を生むことが可能になり、旱魃蝗風水冷害などの際にも困らないような、確かな未来を手にするために、朝から晩まで毎日労働に拘束されて生きている、気紛れなど赦されない、機械的な人生であった。

真神族は離脱を宣言した日から一週間、オルギア(狂躁秘祭)を行った。真神の秘祭密儀的な究竟奥義、オルギア精神、ロックン・ロールだ。

「我々は麦や羊に使役されることを拒んだ。蜜蜂が蜜を取って花粉を運ぶことによって、草花に使役されているように、我々も一地方の植物や動物を大いに繁殖させ、世界に広めようとしている。生存の原理に巧みに取り込まれている」

利用しているようで、利用されているのかも。

物事は味方を変えれば変わる。

もしかしたら、僕らが遊ぶゲームは創られているのではなく、人間が創ることをさせられているのかもしれない。創られることが能動的行為で、創ることが受動的行為なのかもしれない。あらゆる芸術も、靈感となって僕らを衝き動かす。真理も、どこからともなく湧いて来て、人を衝

き動かす。恐れ、求め、意識となって、実存を生ぜしむ。

僕は叙無記について、述べた。

「どのような内容であろうとこの文 x は究竟だ。すなわち、 x という一つの元丈の集合は全体集合と同じだ。 $\Omega = \{x\}$, $\Omega = U$ ってこと。

この文のみが究竟というのは、この一元集合は全体集合の一部であるということ。すなわち、 $\Omega = \{x\}$, $\Omega \subseteq U$ だね。

どのような内容であろうとも（又、なかりうとも）、究竟であるということは、『全網羅』ということなんだ。だから、この文のみが究竟であるということ丈をも網羅する。

それで、このような矛盾した式が成立するという訳だ。

思ったんだが、あの落書きの数式は、結構、応用が利くね。

僕は『叙無記』筆翰第十七段の数式化であるこの数式を、バージョン1と呼ぶことにした」

「なるほどね、勉強にはなったが、試験には役立たないな」

「むろんだ。役に立って堪るか」

そうだ、その方がさばさばした気分だ。

「なあ、ちょっと、小耳に挟んだんだが」

ル・パンが語り出した。

その話は僕も聞いたことがあった。

すなわち、あの数式の落書きは彝之イタルの手によるものだという説がある。

イイヨが手を口に当てた。

「どおりで。ぞっとしたのよね、初めて見た時」

イタルは九年前、十七歳で凄絶な死を遂げた。眞神高の生徒だ（った）。

バンド活動をしていたが、難久簗町神中洲のライブハウスで初ライブを行った際、ステージのパフォーマンスで据付の機材を破壊した。オーナーが訴訟しなかったので、示談となったが、刑事告訴されても不思議はない。学校では停学処分となったが、その期間中に学校の屋上でライブを行って退学となり、しばらく姿を消していたが、顔に龍神の刺青をして帰って来た。

ラスト・ライブは神中洲の公園でゲリラ的に行われ、最後に噴水の盤（コンコルド広場の噴水のように盤が重ねた盞のように層を成している様式の噴水であった）に上がって、ガソリンを撒き、炎を上げさせ、修羅の歌を歌って、人間を嘲った。警察が来て、バンドの仲間はすべて補導されたが、イタル丈が姿を消す。

驚くべきことに、彼は独り眞神山に登っていた。山頂に神の依る磐代がある。磐と言っても、ビルディングのような縦長の立方体であった。自然物には見えないが、人工物である証拠はなく、自然物と言われている。どんなに精巧な整形に見えても、人の手が入った痕跡がなかった。それゆえ、クライミングの器具なくしては、常人は登れない。

しかし、イタルはその晩、登っていた。

聖域の絶対頂点で、身にガソリンを被り、点火し、炎の塊となって飛んだ。墜ち、死す。最後のパフォーマンスであった。究竟の表現、オルギアだ。

いったい、火山に飛び込んだエンペドクレスのように、神になろうとしたのであろうか。誰も見ていないし、誰にもわからなかった。わからないままである。

バンドのメンバーであった天平普蕭は取材に応えて、こう言った、

「おかしな男だった。

あれがラスト・ライブだったんだ。彼の。

自殺じゃない。死は表現の手段でしかなかった。観客もいない、意味すらもない、純粹なパフォーマンスのための。

誰も交えない、思いどおりの、何の制限もないパフォーマンス、そう、死すら彼を制御できなかった。

最もピュアな、純度の高いライブだ。微生物すら存在できないほど純粹な、成層圏を超えた透明な青の空気のように、あらゆる生存を拒絶して……

矛盾だらけだ。彼はあるとき僕にこう言ったんだ。

『……………芸術は平穩なときでなければ楽しめない。所詮、平穩時の慰みに過ぎない。御大層なもんじゃない。

苦しみにしがきのたうつとき、嫉妬の情炎に烙かれ悶え爛れるとき、現実に迫る恐怖・絶望・焦燥に震えて身も心も牽き裂けると、人は人のことなど考えるだろうか。その程度のものなのさ。

戦時や貧困や闘争にあっても楽しめるかもしれない。だが本当の苦しみのど真ん中にいるときには顧みる余裕などないだろう。

芸術は苦しみを救わない。よほどドーパミンかアドレナリンを噴出させる思い込みでもあれば別だが。ふ。

いや、そうであつてもどうか。歯痛止めの呪文もいまや人を歯痛からは救えない。

アートが人生の艱難辛苦を背負ってくれることはない。心をわずかに癒し、堪忍の足しになることはあるかもしれないが。しかし仕事を代わって片付けてもくれないし、家族の世話を看ても

くれない。借金の肩代わりをしてくれることもない。

人は、ただ、独り死んで逝くだけだ。昏い死に意識を塞がれ、その淵に落ちて逝くときには誰も居合わせることができない。

芸術とは何と虚しいものか。

人の営みは。

真実も現実性もない。人は死を超えられない………』
ってね。

しかし、彼は超えてしまった」

思い返すたびに、どんな人か、会ってみたかっただと思う。もうどうにもならないが。時はすべてを解決し、どうにもならない。

「会ったことあるぜ」

唐突に、トリがそう言った。

僕は辛抱堪らず振り向いて、訊いた。

「で、トリ、おまえは何で僕らと一緒に来ているんだ」

「ふ。だから、来てるのさ、ゲエラウト (Get out)」

何がゲット・アウトだ。安っぽいパンク野郎。ネバー・モアと言え。まあ、べつにどっちでもよいが。

クロヤギは少し顔を顰めた。

「なあ、そんなことよりも、考えよう」

「考えてるさ」

「わかってる。思うんだが、普通に、過去問題からも推量すべきではないか」

「普通だな」

「敢えてずらされるかもよ」

「むろん、それも加味して考えるんだ」

「けどさ、どうやって調べるの？」

「まさか、上級生から聴取か？」

「それもありかな。まさか嘘は言わないと思うし」

「バカだな、データベースにアクセスしろよ」

「データベース？」

「通称だ。眞神高HPの生徒専用ページだ。生徒なら、パスワードを持っているはずだ。

それでアクセスできる。

さまざまなものがあるよ。

物好きな人間がいてね、ありとあらゆるデータを蓄積している。過去問も、そのうちの一つさ」

「それって、でも、誰が、どうやって？」

「知らないね。卒業生が在校生に聴取しているか、在校生の誰かが代々引き継いでいるか、もしかしたら、職員かもね」

「なるほど。眞神高の職員はあまり異動しないと言うからな。しかも、全員卒業生だ」調べた。

多岐に及ぶ。

「過去三年間の設問を、年度ごとに、一学期中間・期末、二学期中間・期末、三学期中間・期末の順に、ここに表記する。読み上げよう。

まずは、三年前。

えーと、『見たものは、存在するか』『論理に疑義を呈せよ』『それ、なぜ証明か』『妥当』『大乘非仏説は正しいか』『道^{タオ}について、自由に述べよ』。

ふーむ。

一昨年度。

どれどれ……。『現実とは、何か』『真言・曼荼羅』『存在自体』『宇宙大開闢以前を記述せよ』『神は、数えられるか』『すべては、考概である。だが、考概とは、何か』

昨年度は、と。

やはり、傾向はあるね。

『仏陀は、なぜ、喉の渴きを訴えたか』『意識』『何が起こっているか』『真実。真実とは、何か。真実という型に嵌まるものを真実と言うが、その鑄型はいかにして決められたか』『眼の前』『胡蝶は莊周であったか』『生きる意味』

どうかな。

今年度、既に行われた三回の内容は言うまでもないだろう。周知のとおりだ」

ノーイロが唇をプレスリーふうに歪める。

「『叙空』『堂々果敢』『参加の解析』だったな」

もう一度、メモを眺める。

「さあて、多岐にわたると言ったが、同じような内容も多い。『それ、なぜ証明か』『妥当』

『現実とは、何か』『存在自体』『すべては、考概である。だが、考概とは、何か』『意識』『何が起きているか』『眼の前』は、同じ問いだ。存在ということの直截それ自体＝直観それ自体について、問うものだ」

「なぜ、そう言える？ 正解を知らないだろう」

「正解なんかがあると思うか」

「そりゃあ、まあ」

「そして、今年はそれ系の問題が未だない」

「うーん、そういう攻め方、当たるかなあ」

クロヤギが首を捻る。

僕も、そう思う。

「それ以外だと、仏教系が多いよな」

ノーイロが言う。僕もそれは気になっていた。

「そうだね。眞神の『龍肯』と仏陀本来の思考は近い」

「仏陀本来の考え？ つまり、おまえのその発言は、原始仏教がオリジナルで、後発のもののは似非だという感じを醸しているのか」

「そうなんだけど、それについては訂正しよう。確かに僕は以前、大乘非仏説を奉じていた。密教に至っては、土俗の宗教と混淆したゲテモノと思っていた。

けど、その考えは変わって来た。大乘も密教も禅宗も、言語不可説の思想と解する。密教や禅宗など、比較的新しいものは、行に重きが置かれる。きょう

実践・経験の哲学、行動の哲学だ。今年の傾向（『堂々果敢』『参加の解析』などともよく合うので、そっち方面かもね。

意外にも、求聞持聡明法の空海とは、なんて問題かもな」

「おい、おい、今までの『全網羅』は、何だったんだ」

「考え方さ。『全網羅』だぜ」

「それって、無駄だったってことと同義じゃないのか」

「かもな。仕方ないよ。現実さ」

「ったく。十四歳のくせにわかったふうを言うな」

「十六も大して変わらん。大局的にはね」

そんなやり取りをよそに、ル・パンはじっと表を見ていたが、

「なあ、『妥当』って、どうよ。

おまえは、直観自体を問うと言うが、そのカテゴリー丈じゃないぞ。見方を変えれば、他のものとは、少し毛色が違う。

おまえら、今まで出た回数が多いものに注目するが、逆に出ていないものが、ってこと、考えられないかなー」

「毛色が違うか」

ノーイロが問うと、ル・パンはさらに、

「違うじゃん。」

まるで、ENS（エコール・ノルマル・シュペリール École Normale Supérieure、高等師範学校）みたいじゃないかい。フランスのさ」

「なるほど」

ノーイロは素直に感心していたが、僕は気に食わない、

「いちいち、フランスの、と言わなくてもわかる」

ル・パンはにやにやしてる丈なのに、ノーイロの方が眉を上げ、

「他にENSという略がないと言い切れるか？」

「僕らの共通の話題には、それしかないね」

「そうと言い切れるか」

「そうか、俺は知らないが」

トリが言った。ま、こいつは知らないかもしれないな。裏口入学は眞神にはないはずだが、どうやって入学できたのか。

ENSはグランゼコール (Grandes Écoles) の一つで、最高峰だ。

グランゼコールとは、もともと王制時代からあったが、フランス革命の時に高度な理系技術者などの知識層が散逸し、急遽、専門職業人を養成する必要に迫られ、国家が創った、フランス独自の教育機関で、大学のような学究の機関ではなく、技術系や政治系など様々な分野の専門職を養成する教育機関であった。入学するためには、高校卒業後にグランゼコール準備級（通称プレパ）で、二年間勉強し、やっと試験を受けられるという。しかも、その二年間は猛勉強が必要で、太陽を見ることがないと言われている。

大学以上の難関だが（ちなみに、進級できなかった者は大学に編入することが多く、グランゼコールの受験が三回までなので、三回落ちた場合も大学に行く。つまり、大学の方が格下なのである）、その中でも、最高峰が略称ENSである。

かつて、そのENSの哲学のテスト問題で、「一語『Expliquer（エクスプリッケ）説明する』と

いう不定詞』というのがあり、しかも「計算機の使用は禁止」と不可解なことが書き添えられていた。与えられる時間は、この一問で六時間である。

部屋に戻って、僕は独り沈黙考した。何かを手繰り寄せようとするかのように、手指が動き組まれ絡み、掌が合わさり離れ、半ば無意識的に印契を成す。こういった行為は哲学ではなく、心理学に帰せられると思われるが、現実にかかるすべてを取り上げなければ、現実的な答ではない。

僕らの思考には何かが足りなかった。伝統的な思考には。甚深な瞑想に入る。

興味が既にテスト問題から乖離していた。梵天勧請だ。梵天が僕を引き戻したのだ。だから、ノーイロらと別れ、今、ここに独り、存在していた。

「仏陀は、なぜ、死なず、布教したのか」

その問いが心を離れなかった。心で考える。なぜ。人は、なぜ、なぜと問うのか。あゝ、埒の明かない設問だ。原蛇よ。心よ、もっと飛べ。天翔よ。

それにしても、あの解脱を味わっては、到底、世間に戻りたくはあるまい。なぜか、釈迦牟尼よ。

なぜ、還って来たのか、慈悲などではあるまい、慈悲など、癡かさ、無知な執著でしかない。

厭離すらも、執著だ。甚深微妙の悟りに執著するがゆえに厭離する。仏陀は最も古き聖典に於いて言った、「この世も、あの世も捨てる」と。ソリッドな魂で生きたい。僕は。

予想委員会に出した予想問題は「全網羅を数式で表せ」と「この数式を説明せよ」であった。七人連名（トリも入れた！）である。

「当たり前過ぎたかな」

クロヤギが言うと、ノーイロは、

「まあな、ゲームさ」

「くだらない加点なぞ要らない」

僕はすべてを嫌悪したい気持ちだった。イイヨは、

「間違ってもいいわ、楽しかったから」

ボルドーも頷き、

「よい経験だった。ユーライがどう採点しようと、ユーライの意見でしかない。何も後悔はない。慮るなんて、莫迦馬鹿しいさ」

そうだな、そうだった。哀しみても哀しみ、哀しみを追うな。楽しみても楽しみ、楽しみを追うな。眠ろう、今は。

試験当日、僕は気持ちよく目覚めた。

歯を磨き、口を漱ぎ、顔を洗う。髪を梳く。髪の一房を、三つ編みにした。古代ギリシアのように。

戦の前の戦士のように、着るべき服を再思考する。鎧兜を改めて点検するように。昨晚、寝る前に決めて用意しておいた服はやめ、何を着ようかと迷ったが、シーアイランド・コトンのシャツに、カシミアのセーターを重ねることにした。肌触りや保温性、軽やかさで選んだ。

鞆を再々度、点検した。聖なる騎士のごとく、ペンがソードで、消しゴムがシールドだ。食堂では、誰にも会わなかった。コーヒーを少し飲んでから、バゲットとチーズ、軽めの食事にした。

胃を満たすと思いが鈍るが、長丁場なので、体力も必要だ。そのバランスも考慮して選んだ。

教室に上がると、独特の静寂が狭霧のように漂っている。これが好きだった。問題用紙が配られる。緊張、アドレナリン、愉快だ。生きている実感がある。スリルを求める生き方こそ、健やかな時の生命の面目躍如ではあるまいか。

「始め」

試験監督が言った。僕は紙をめくる。

問 『叙無記』肇輯十七段を数式に拠って記せ。その理由を漢字四文字とせよ。又、その四文字を挙げた理由をも附すべし。

まず『叙無記』を知らなければならないが、これを知らない者は眞神高校に入学していない。

「うわ」

思わず僕以外の者は心の中で声を上げたであろう。提出した予想は外れたが、第一関門

は突破できたのである。

七人全員がバージョン1の数式を書いた。

理由を漢字四文字、は各自の対応とならざるを得ない。熟語（四文字熟語）と言っていないところが畏かなとも思ったが、憶見を交えず、一般にわかるように四文字で説明し尽くそうとすると、四文字熟語から借用せざるを得ない。

熟語なら、歴史的・文化的背景があるから、自分勝手なただの思い込みで四文字を連ねるよりは、拡がりとお深い意味が醸し出せる。

四文字熟語からの借用とならざるを得ないので、熟語で書いたら減点、などというロジックが隠されている可能性はないと見てよいであろうと思料した。

書き終えて僕は充足の吐息を漏らす。

テスト後に、暖炉の前に僕らは集まった。

「こう来るとはね」

ノーイロがあふれる微笑を泛べる。

「結果的に、予想が合っていたのと同じだわ。答が書けちゃったものね」

イイヨの双眸は、この日は睜みひらいて、プラス・アターナーのように燦めいていた。古代ギリシアの紺碧の空と、葡萄酒色の海と、石灰岩の海岸とが想い泛ぶ。思考が自動操舵であることが（城の石垣の）切込接きりこみはぎのようにぴったりと一ミリの相違もなく、決定と観ぜられる。

「で、皆、何て書いた？ 漢字と説明」

クロヤギは不安そうだ。負け癖が顔に張りついていていた。性格は彼のせいではない。

ボルドーがタブレットを出し、

「では、時計回りで、順に言いたまえ。打ち込むから」

投影式のレーザー・キーボードを見せたかったので、

「じゃ、僕も打ち込もう。照合した上で、本人の確認も取る。そうすれば、暴流に差す棹のように確かだ」

「言いたいことがよくわからん。わかるか、ル・パン」

「何を今さら、ノーイロ」

聴取した各自の回答は左のとおり。ついでに、テストの翌々日にわかった結果（点数）も記す。

イイヨは強気を喪わないまなぎしを細め、いつもどおりのきらつと鋭い細釣り目に戻り、

ニヤリと笑って、「四面楚歌」と書いたと申告した。

「お手上げよ。ってことよ」と言い添えて。

点数は、九〇点だった。これは奇跡に等しい。凄いことだ。女性枠でもあるのか？

逆に、不運な奴もいる。

トリはこの日のために滅茶苦茶にパンキーな服装で来ていた。問題を見ると、すぐに墨を硯に摺って筆を執り、すらすら書き始め、「究竟涅槃」。涅槃を究竟す。魔訶般若波羅蜜多心経の一節だった。その理由も一気呵成に記す。

その文章は原蛇ウロボロスのに無際限な、円環のように繰り返すものであった。延々と敷衍し、結語に至って、「魔訶般若波羅蜜多心経の陀羅尼（真言）のように意味がないから。真の無空であって、全網羅と同じで、ただ、現実ということである」と結んだ。

点数は、五点。しかし、まあ、正攻法、と言うか、当たり前な答では、ここではダメなことが多い、ってことが一年生の僕らですら、この頃になると、もう、わかってくるものだが……

ボルドー、「日常茶飯」。

理由は、「なぜなら、べつに切磋琢磨でもよかったから」。

七〇点。そう、そう、こんな答の方が「受け」は良い。

ル・パン、「吾唯知足」。

理由、「贅沢さに飽いて蕩けた俺が好きな言葉だから。いい言葉だろ？」 おまえ、誰

だよ？（笑）

さすがに、これは五〇点。

ノーイロは、「衆善奉行」。

「人、堂々果敢すべし。言うまでもなし。以上」と。

七〇点。

クロヤギ、「一切皆空」。

理由は、……これもまた、『全網羅』に関する、トリ同様な、無限に螺旋を描いて上昇する長文なので、是非省略したい。

五点。基本的に彼は損な性分である。

僕、ジャクニは「梵天勧請」と書いた。

なぜ、仏陀は一点の曇りもない達成、満足を得て、死ななかったのか。甚深微妙な法が世間に汚されることを懼れなかったか。

喪うまいとする厭離も執著に過ぎない。普通に生き、死す。それが仏陀の堂々果敢であった。

それが梵天の声、梵天の勧請である、と。

八〇点。

さて、試験が終わって六人が学寮一階の暖炉の前に集まると（トリはそれ以降、来なかった。パンクな奴だ）、誰しも充たされた、やり遂げた表情だった。安楽椅子に深々と坐る。

「答案返却が楽しみだな。勉強は嫌いだが、俺は試験が好きだ。自分の力を誇示できる。トレーニングは嫌いだが、公式戦が好きだ、っていうのと同じさ」

「ふん。ノーイロらしいな。一流のアスリートには向かないが。俺には嫌いな考えだが、人はそれぞれさ」

ハグする真似をして、

「ボルドー、おまえは俺の真の友人さ」

クロヤギはどこか諦めた顔で自虐的なユーモアを見せ、

「皆が一流じゃ困るからね。世界は成立しない」

スポーツ万能男は哄笑した。

シンバルみたいな奴だ。細かく砕けた極微小の粒のような太陽の光が散らばったみたいだった。獅子の鬣のように。

二日後である。答案返却があった。テストの配点について、答（数式の部分）に五点、漢字四文字と理由に九十五点を配しているという説明がある。

トリとクロヤギの理由説明は零点ということ。

その夜、再び暖炉の前に集まると、僕は委員会からもらってきた、緘のされた封を切る。

「聴き給え。」

予想委員会へ提出した予想問題の正解度に応じて与えられる加点だが」

最大五点がもらえる。テストの採点結果に附加されるのだ。ただし、合算しても、百点は超えられない。百点を超える場合は、百点で頭打ちとなる。

「きつと、零だな」

ノーイロが言った。

そのとおりであった。ちなみに、他の個人・グループも皆同じで、加点された生徒はいない。

それがふさわしい、そうあるべき、などと言うつもりはまったくない。ただ、現実の真つ只中に既に、剥き出しな状態で、露呈され、独り唐突にある丈だ。

いや、^{ひたすら}「現実」も「真つ只中」も「剥き出し」も「露呈」も「独り」も「唐突」も、只管に、唐突で、物的にぶっくら棒な無表情なので、何言ってんだか、全然、わかんないが。

或る意味、侘茶のように「冷えて、凍えている」。

僕は改めて、銘『卯花牆』を愛でるよう愛でた。

^{ひろ}飛瀧神社や、路傍の花の雄蕊の花粉や、ブルース・ハープの音や、ブリキの空き缶のよ
うに、よき景色だ。だが、追ってはならない。ふ。